

建設コンサルタント海外奮闘記 ～海外派遣研修が拓く、若手技術者の新たな一歩～

国際委員会 葛野 敦 | KUZUNO Atsushi

海外派遣研修から始まる国際人材育成の取り組み

これまでの奮闘記では、異動や転職を契機として海外業務の最前線へと身を投じ、懸命なOJTの積み重ねを通じて国際技術者として活躍してきた方々の事例などを紹介してきました。本稿では少し趣向を変え、社内研修制度を活用して国際技術者への第一歩を踏み出した若手技術者の挑戦に焦点を当てます。

主に国内業務に従事する株式会社建設技術研究所では、2022年より若手技術者を対象に、海外グループ会社である英国建設コンサルタント Waterman Group Plc への海外派遣研修を開始しました。本研修は、国内技術者の国際的視野の拡大および海外人材育成を目的とした取り組みです。今回は、この海外派遣研修者に、研修期間中の経験や奮闘について座談会形式でお話を伺いました。

座談会メンバーの紹介

- 高橋 円 (左上)：河川構造技術者/国内業務経験10年/2022年9月～2024年8月まで研修派遣/帰国後は大阪にて国内業務に従事中
- 祐谷大輝 (左下)：河川計画技術者/国内業務経験5年/2023年7月～2025年4月まで研修派遣/帰国後



写真1 座談会の状況(蓮見さん・辻さんは英国から参加)

は東京にて国内および海外業務に従事中

■蓮見和紀 (右上)：都市関連技術者/国内業務経験9年/2024年9月より研修派遣中

■辻 哲也 (右下)：河川計画技術者/国内外の業務経験6年/2025年5月より研修派遣中

※国内業務経験年数は派遣時点

海外派遣研修に挑戦した背景と動機

高橋：国内で約10年間、河川構造物の設計業務に携わり、一通りの経験を積む中で、「一度は日本の外を見てみたい」という思いが次第に強くなりました。本研修は原則2年間と期間が明確で、家族帯同や帰国後のキャリアも見据えやすかったことも応募を後押しした要因です。

祐谷：大学院時代に留学生と共同研究を行った経験があり、海外で働くことに対する抵抗はありませんでした。国内業務を軸に、部分的に海外業務に関わればという意識でしたが、上司との面談をきっかけに「本格的に挑戦してみよう」と決断をしました。

蓮見：入社当初から海外業務には関心がありましたが、管理技術者として業務経験を積んだタイミングで研修制度を知り、次のステップとして挑戦を決意しました。

辻：入社後の数年間にわたり専門技術分野で国内業務経験を積む中で、専門性の一つとして「国際人材」という選択肢を意識するようになりました。業務を行う上では専門知識だけでなく、自分が先頭に立って議論や関係構築を行う能力が必要であると考えていたこともあり、本制度への応募を決めました。

海外実務を通じて見えた業務と働き方の違い

辻：最も強く感じたのは、会議や議論のスタイルの違いです。

英国では年齢や役職に関係なく意見を出し合い、その場で合理的に結論を導きます。日本では事前調整や根回しを重視する傾向が強いです。どちらが良い・悪いという話ではないですが、新しい提案や発想を生み出す場面では、英国式のオープンな議論から学ぶ点は多いと思っています。

蓮見：英国ではリラックスして仕事ができる環境が整っています。英国の同僚は心に余裕を持ちながら仕事に集中している姿が印象的です。

祐谷：治水計画の分野では、日本と英国で基準や考え方に大きな違いがあると感じました。一般的な傾向として、日本では細かな手順や形式が重視されますが、「それが本当に洪水リスク低減という目的に対して最適なのか」と俯瞰的に考えるようになりました。形式に縛られない英国のアプローチから学ぶ点は非常に多いと感じます。

高橋：設計業務では、日本で培ってきた技術力は英国でも十分に通用すると感じました。

海外実務で直面した課題とその乗り越え方

高橋：構造力学や土質力学といった日本で培ってきた基礎的な工学力が最大の武器となりました。技術という共通言語があるからこそ、言葉の壁は乗り越えられると実感できました。

祐谷：技術力と高度な英語力を同時に磨くことは、決して簡単ではありません。特に英語力は、「読む・書く」以上に「聞く・話す」が圧倒的に重要だと感じました。

辻：英語力に関しては、必要とする水準は個人によっても考え方が異なりますが、より正確な理解と表現を目指すのであれば、常に課題となります。とにかく話す機会を意識的に増加させることが重要だと考えています。また、自分のように単身赴任の場合、現地で友人をつくって話すことが英語学習と生活の充実度の面で非常に重要だと思っています。

海外経験を踏まえた今後の展望

高橋：日本で培ってきた調査や設計などの技術を今後は海外にも展開していきたい。単に業務を行うだけでなく、将来にわたる国際的な関係づくりや技術者同士の交流の礎を築いていければと考えています。

祐谷：グループ全体の海外展開に貢献していきたい。海外にはまだ顕在化していないニーズも多く、潜在的な課題を引き出しながら、日本の先進技術で世界に



写真2 英国技術講演会・展示会での技術紹介(辻氏)

貢献できる存在になりたいと考えています。

蓮見：都市分野の海外連携の中心を担っていきたい。「この経験を日本での業務にどう活かせるのか」を常に意識しています。

辻：「海外業務」と一括りで考えてはいないですが、現時点では私の所属部署にとって海外展開はチャレンジングなプロジェクトです。国内の一般的な建設コンサルタント業務とは異なる性質の戦略が求められることも多く、その分、継続して挑戦したいという気持ちは強く持っています。

これから海外業務に挑む技術者へのメッセージ

辻：海外では、日本とは異なる地形や都市構造、人口構造、災害リスク、社会課題に基づいた業務に携わることができます。それによって日本の社会的課題や立ち位置を俯瞰的に捉えられるようになります。ぜひ現地に行き、自分自身で見て判断してほしいと思います。
蓮見：海外に興味があるならば、機会を逃さず挑戦してみてください。海外経験者は増えているので、まずは話を聞いてみるだけでも良いと思います。

祐谷：海外で働く中で、国内の商習慣や業務プロセスにとらわれ過ぎないことの重要性を強く意識するようになりました。「どうすれば顧客に本当の価値を提供できるのか」を軸に柔軟に頭を絞れるようになれば、国内外を問わず活躍できる人材へと成長できるのではないかと感じています。

高橋：年齢や家族、社内での立場など、挑戦の障壁は年々が増えていきます。それでも「やりたい」と思った時に一度挑戦する価値は大きいと思います。海外で得た視点は、必ず国内業務にも還元できるはずです。

おわりに

本座談会で語られた経験が、海外に挑戦しようと考えている建設コンサルタント技術者の皆さまにとって、一歩を踏み出すきっかけとなれば幸いです。